

住人の本音に、
福祉の理想を見る。

フッガーライは、むかし「街のなかの街」と呼ばれた。城壁に囲まれた街に、さらに城壁に守られた空間が広がっていたからである。教会があり、学校があり、お店があった。文字どおり、街のなかの街だった。

時代は変わり、今はお年寄りの姿が目立ち、老人養護施設がなにかのような印象がある。しかし、今でも4か月の赤ちゃんから97歳という長生きのお年寄りまで、幅広い世代の人びとがこのフッガーライで暮らしている。住民は合わせて150人。入居希望者はあとを絶たず、現在、20人ほどが空きを待つ。

クリスティーネ・トゥーマさん(62歳)が、2012年9月にフッガーライでの暮らしをはじめ、ちょうど1年が経った。もちろん生まれも育ちもアウクスブルクである。子どものころには、遠足でフッガーライを見学した。

トゥーマさんは市庁舎広場の近くにある人気のビアホールで、45年にわたってまじめに働いた。料理をつくり、ビールをグラスに注ぎ、給仕した。長い間、立ち仕事をつづけることで、膝と腰を痛めた。それは一種の職業病だった。仕事をつづけることができなくなったとき、思い浮かんだのがフッガーライだった。貯蓄と年金だけで老後を過ごすのが不安だったのである。

「ここでの生活をはじめ、わたしは多くのものから自由になれたと感じました。これからは年金生活を楽しみ、平和に暮らしたいと思います」とトゥーマさんは言う。

彼女の部屋は2階にある。間取りは1LDK。床面積はおよそ60平方メートルで、これはどの家も共通している。日差しが窓からふんだんに入る、広々として明るい部屋だ。新しい生活に合わせた改装を絶えずおこなっているため、古い感じはしない。贅沢を思わせるものとはとくになく、パソコンさえ見当たらない。

フッガーライは「貧しい人のための家」といわれていた。しかし、貧しいがゆえの暗さや卑屈さはここにはない。質素かもしれないが、普通の生活がただただあるだけである。500年前の叡智が示した、生きるための解決策をなぜ、いまだに普遍化できているのか、フッガーライは問いかけている気がする。



5,6.観光客は一般公開されているフッガーライ博物館で、住人の暮らしぶりを垣間見ることができる。2か所あり、ひとつは建築当初の様子を伝えるために保存され、ひとつは現代の生活を再現している。博物館の部屋はやや窮屈に感じる。

1.トゥーマさんの部屋は、ベンキがまだ新しく、その分、明るく感じる。玄関を入ると、突き当たりに浴槽つきの風呂がある。日本とはちがひ、ドイツにはシャワーだけの家も多い。2.ゆったりとした寝室には、化粧台やワードローブがある。3.キッチンには最新設備が揃う。改装時に新しいライフスタイルに合わせていく。そのための予算は悩みの種。4.おしゃれに気を配り、明るく生きる。



玄関に立つトゥーマさん。通りには名前と番地がある。フッガーライは第二次世界大戦で壊滅的な被害を受けた。

私の部屋は階段を上った突き当たり。



旬の新鮮な素材で料理するのが得意よ。

友達にフッガーライで暮らしはじめたことを告げると、「わたしも住みたいと思っていた」との反応が返ってくるそうだ。



トゥーマさんは自家醸造のビールで愛されるビアホールで働いていた。そのとき、韓国の雑誌の取材を受け、仕事姿をとらえた写真が掲載された。

手にした自由は平和な時間。
働きつづけた人生のやすらぎ。

フッガーライの
住人。



私が
富者ヤコブと
呼ばれた男だよ。



ヤコブ・フッガーの胸像。世界を股にかける商いで、国王や法王に貸し付けるほどの財をなした。

ヤコブ・フッガーが私財を投じた。

ミュンヘンから電車で40分足らずに、アウクスブルクの街はある。街を歩きはじめると、質素な暮らしぶりが窺えるのだが、それもそのはず、質実剛健なドイツのなかでもとくに儉約ぶりで知られている。世界的に名高い社会住宅フッガーライは、そんな街の一角にある。

街の中心部である市庁舎広場からつづく緩やかな坂を下っていった界限には、小さな店が立ち並び、下町風情が漂う。むかしは職人や外国人が多く暮らす、貧しい地区だった。ほどなく青と白のストライプ模様が目を引き門が見えてくる。それがフッガーライの入り口である。

フッガーライは1521年から、貧しい人のための住居として建てられた。当時、イタリアとの交易路上にあたる街は大いに繁栄し、世界中の珍しいものが集まった。しかし、人口の9割にもぼる人びとは貧困にあえいでいた。現代とは比べもの

にならないほどの格差社会である。

フッガーライはアウクスブルクの商人にして銀行家のヤコブ・フッガーが私財を投じて建てた。家賃は年間1ライングルデン。現代のお金に換算するとわずか0・88ユーロで、今も変わっていない。入居にあたってはいくつかの条件がある。「貧しいこと」「アウクスブルクの住人であること」「カトリック教徒であること」で、これも今も同じだ。

フッガーライはベネチアにあった船員向けの住宅や、ニュルンベルクにあった織物職人向けの住宅などをモデルに建てられた。ともに怪我をして働けなくなった人々のためのものだった。フッガーライがオリジナルでも、世界ではじめてつくられた社会住宅でもないわけである。しかし、約500年間にわたってつづいているという意味では、世界最古の社会住宅になる。

フッガーライは、当初からいかに持続可能なものにするかが検討されていた。その秘密のひとつが、森林資源で運営資金をまかなうこと。現在もそれは変わらず、運営資金の7割をフッガー家の所有する森林約3200ヘクタールから切り出される木材が占めている。これは「現金はいつかなくなるが、木は森がある限り、末永く持続する」というフッガー一家の考えから生まれたものだった。



1.フッガーライに据えられたフッガー家の「百合の紋章」。2.各戸で異なる玄関の呼び鈴。暗くなっても呼び鈴のかたちで自分の家かどうかを確認できる。3.花などで窓辺を飾る家が多い。4.各戸ごと玄関は独立し、プライバシーが守られている。5.手入れの行き届いた庭。人の目を木で隠す家も。6.観光客の多い屋間は住民は外にあまり出ない。しかし、窓辺に飾られた人形などが歓迎の意を表しているようだ。



地域学習の授業でフッガーライを見学する小学生。班ごとに調べながら先生のつくった質問集に答えていく。

キリスト精神が生んだ
儉約の街の社会住宅。

フッガーライを歩く。

フッガーライの1年の家賃はいくらでしょう？



入り口付近にある聖マルコ教会。「神の前では平等」という考えが、フッガーライの基になっている。アウクスブルクはルターによる宗教改革の舞台で、フッガー家はカトリックに与した。

ドイツのアウクスブルクに、家賃が年間1ユーロ弱の社会住宅がある。
家賃に追われ、住宅ローンに苦しむ身からすれば、夢のような話だ。
この住宅の名前はフッガーライ。今から約500年前、
16世紀のはじめ、中世ドイツの経済人ヤコブ・フッガーが構想した豊かな恵みの世界は、
今もなお絶えることなく、伝統の灯を静かに守りつづけている。
フッガーライを訪ねると、歴史の彼方から福祉の意味を問いかけてきた。

500年前の社会住宅

フッガーライ見学

photographs & text by Yukihiro Masuda

フッガーライの住人は
何人でしょう？

GERMANY
FUGGEREI

フッガーライはさきずめ江戸時
代の長屋。長屋の歴史を
比べるとかなり古いといわ
れる。フッガーライは江戸時
代の子のたもとを築かれた。